

## 夏目漱石と岡本太郎

*Junko Higasa 2013.12.30*

夏目漱石は文学評論の中の『スウィフトと厭世文学』で特に「ガリヴァー旅行記」を褒めている。大人でも子供でもそれなりに読めるところ、文章に気取りや無駄がないところ。『諷諭以外に話そのものが頗る旨く出来上がっている』そしてこの物語に出てくる Yahoo (人間の形をしたケダモノ) については、あまり侮辱が烈しいから厭な心持がする。但し自分で自分が厭になるのである。スウィフトを怒ったり、喰ってかかる気はなくなってしまうと記す。スウィフトの作は不愉快であるが、漱石はそれを読み通した。読み通したということはそこに愉快があったということになる。そのためスウィフトは非常な不快を与えている代わりに深いと評している。それが漱石の認めた藝術である。

そこでふと岡本太郎氏の『自分の中に毒を持って』を思い出した。岡本氏の作品の前に 2 時間も立って観賞した後「いやな感じ！」と言って立ち去った女性客を、岡本氏は真の鑑賞者だと言った。『ただ不愉快なものならば、そんなに凝視しているはずがない』チラリと見て顔をそむけるか、見もしないだろうと言う。岡本氏は「本当に燃えている生命が、対象物として眼の前に現れたとき、それは心地よいものではなく、いやな感じでぐんと迫ってくる」と言う。

太郎氏の父である岡本一平氏は、漱石山房の画を描いている。縁ある二人の藝術論の一致は興味深い。